

カルマ・チャクメーの極楽願文 『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究

——往生の第二因，七支供養より廻向と，第三因，正覚への発心の段——

藤 仲 孝 司

【抄録】

カギユ派，ニンマ派の学者・行者カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ，1612-1678）著『大楽誓願』は，ツォンカパ（1357-1419）著『最上国開門』とともに，チベットで最も高名で普及した極楽願文であり，埋蔵経「虚空法（天空法）」に所属している。本稿では，中御門敬教氏との協力のもと，この極楽願文の往生の第二の因，福德を積むことである七支供養の第七，廻向と，第三の因，発菩提心と，第四の因，自他の極楽往生のためへの善根の廻向の冒頭を扱った。

キーワード：カルマ・チャクメー（ラーガアスヤ），極楽願文，廻向，『清浄大楽国土誓願（大楽誓願）』，七支供養

一昨年，昨年と，カルマ・チャクメー（1612-1678）の『清浄大楽国土の誓願』略称『大楽誓願』を，中御門敬教氏と共同で翻訳研究して発表している。チャクメーはカギユ派・ニンマ派の学者・行者であり，いわゆる「無宗派運動 Ris med」の創始者の一人となった。この極楽願文はチベットでツォンカパの『極楽願文・最上国開門』とともに最も広く普及した二大極楽願文の一つであり，埋蔵経「虚空法（天空法）」の中心となる典籍である。すでに述べたように『大楽誓願』は極楽往生の四因の説示をその基本構造としているが，一昨年は，序分と，第一の因として無量光仏と観自在，大勢至の両菩薩と極楽浄土の形相をたびたび作意する部分，第二の因として福德の資糧を積むことが七支供養として提示されているうち，七支供養の第一，帰命の支分，第二，供養の支分の部分を発表した。昨年は，それに続いて，七支供養の第三，懺悔の支分から第六，祈願の支分までを発表した。本稿はそれに続く個所の和訳研究であ

る。内容は、七支供養の第七、廻向の支分と、極楽往生の第三の因として正覚へ発心する段（願文自体は無く『弁別積』に論及される）と、第四の因として善根を廻向する段の冒頭を扱っている。翻訳研究の方針や記述方法については、昨年度の発表（『佛敎大学総合研究所紀要』19）を参照していただきたい。すでに述べたように、この願文やその註釈文献は文言が簡略または晦渋の箇所も少なくないが、できるだけ逐語訳に努めると同時に、理解しやすいように註において補足説明するようにした。

本文和訳

[2-2-7. 疑の対治—善根を廻向する支分⁽¹⁾ cf. 『弁別積』 49b3]

これを初めとして、私の〔過去・未来・現在の〕三世の〔諸々の〕善すべてを（PS12b）、〔六〕趣の有情すべてのために廻向します。すべての者がまた無上の正覚を速やかに得てから、三界の輪廻を坑（あな）から揺さぶり出すように！

⁽²⁾その善が私に速やかに成熟してから、今生において十八の横死⁽³⁾を鎮め、無病〔の健康〕、若さが広がった身体は力を具え、吉祥・円満が無尽である〔。その〕ことは、〔例えば〕夏〔の雨期〕のガンジス河のよう。魔・敵の加害が無いし、（Toh.8a）正法を行ずる。思惟する義すべては法に（PS13a）相応し、意のままに成就する。教え⁽⁴⁾と衆生へ広大な利益が成就し、〔六趣のなかでも〕利益を具えた人身⁽⁵⁾が（東洋 6b）（祝 224）成就しますように！（宗 654）

[2-3. 極楽往生の第三の因—正覚へ発心する⁽⁶⁾ cf. 『弁別積』 52b6]

[2-4. 極楽往生の第四の因—善根を自他が極楽に生まれる因として廻向する⁽⁷⁾
cf. 『弁別積』 53a2]

私と私に関係する〔有縁の〕者すべてが、ここから死去した直後、比丘の僧伽により囲まれた変化の無量光仏が、面前に現前に出現なさりますように⁽⁸⁾！それが見え、意（こころ）喜び、現れめでたく、死の（PS13b）苦しみが無いように！菩薩の八兄弟〔すなわち八大菩薩〕⁽⁹⁾が、神変の力でもって虚空に出現なさり、極楽に往く道を示し、引導してくれます（Toh.8b）ように！

⁽¹⁰⁾悪趣の苦しきは耐えるべくなく⁽¹¹⁾、〔堅固に見えた〕天や人の安楽・幸福は無常になる。それに怖れる心が生じますように！無始〔の時〕から今まで、この輪廻における時間は長い—（宗 655）それへの厭離が生じますように！（PS14a）人から人に生まれるのはよろしいが、無数の生老病死を経験する。悪しき時代の濁り⁽¹²⁾においては障碍が多い。人と天のこの安楽・幸福は、毒と（東洋 7a）混合した食べ物

のように、欲することが毛ほども無いように⁽¹³⁾！

〔七代までの〕親戚，食べもの，財産，仲良き友たちは，無常であり，幻術，夢のようである。貪欲・執着は毛ほど〔も〕無いように！土地，国，氏族，家屋は，夢の対境〔ないし国〕の家屋のように，(PS14b)諦（真実）として〔すなわち実体として〕成立していないと知りますように！

註

(1) 『弁別釈』(49b4-50a3)に次のようにいう—

「第七：疑の対治—善根を廻向する支分は，およそ廻向するなら，現在のこの善を始めとする，私が過去・未来・現在すなわち三世に積んだ諸々の善を知において一方にまとめてから，何へ廻向する〔のか，という〕なら，〔六〕趣の有情すべてのために(50a)廻向するのです。何のために廻向するか〔という〕なら，〔六〕趣の有情すべてでもまた，無上の正覚，〔円満な〕正等覚者の位を，長い間ではなく速やかに得てから^{※1)}，一人〔の有情〕をも残さず，三界の輪廻を器の底から取らえて揺さぶり出したように，坑（あな）から揺さぶり出す^{※2)}ように！」

※1) 六道の有情が正等覚してから三界の輪廻を揺さぶり出すのでは，順序が逆転しているようである。直接的な誓願対象である六道の有情がすべて正等覚してから，直接的な誓願対象でない輪廻全体をも救済する，と考えられなくもないが，あるいは言葉を補足して「私自身が正等覚者の位を速やかに得てから」と理解すべきかと思われる。

※2) *dong nas spugs par gyur cig* などとある。*dong*（坑）は *me dong*（火のあな）といった用例のように地獄などの悪趣に転落した状態，または周囲の見えない輪廻の苦境を意味する。*spugs pa* は容器に入って中々出てこないものを震動させて出すという意味であり，六道の境遇が離れがたいことを含意している。

(2) 『弁別釈』(50a3-51a1)には次のようにいう—

「概して，小さな善根のようなものもまた，有情すべてに廻向しても満足しないのと同じく無い〔という〕数ぐらいが満足する。食べ物と肉の取り分が命令されたようなものではない，と仰っている。そのようなになった善〔すなわち〕广大で長期の強力なその善の果が，私において後〔生〕に成就する〔までの〕暇無く速やかに成熟して，今生に現法において非時の〔横〕死の十八^{※1)}を鎮めて，病無きこと〔すなわち健康〕と，若さが広がった〔健やかな〕身体は(50b)力を与えて，吉祥・円満が無尽である〔その〕ことは，〔例えば〕夏のガンジス河のように河が増大し広がった〔ようなものである〕。そのように吉祥・円満の因〔である〕物品，資財などが増長したなら，それに対して〔心が〕散乱するので，法が成就しなくて，誘惑^{※2)}，天子魔などと円満を受用するそれは，千の天・鬼の合図です。盗む・奪う・毀すなど敵〔から〕の加害が無いし，〔上への〕供養・〔下への〕布施など正法を行ずる助けになることと，私の思惟した義（こと）からすべてが法にかなない，法に順じて，すべて妨げ無く意のままに成就してから，勝者の教えの宝に対して〔為すべき〕仕事ができることと，その威徳から世の衆生すべてへ当面と究竟の広大な利益が成就する〔ところの〕そのような大きな利益を具えた人身が，成就しますように！(51a)と誓願します。」

※1) 次の訳註を参照。

※2) *bslu brid* とある。*slu byed* と読む可能性も考えられるが、表記がより近いことから '*brid* と読んだ。『大楽国土誓願の註疏』 p.245 にも *dga' brid* (喜びまどわす) という。いずれにしても、「誘惑するもの〔である〕天子魔」とつながるのであろうか。

『大楽国土誓願の註疏』 pp.245-246 は、この段落が単なる現世利益への祈願ではないことを明確にしている。すなわち—

「当座の利他が成就する因について仏子の行のために誓願することは、そのような大いなる発心により廻向された善それがまた後〔生〕を待っている暇は無い。この依処〔の身〕より自他の利益を成就することが必要なので、私に今生において速やかに成熟してから、十八の横死を鎮めて長寿は日月のように、病魔などの侵害が無いのは金剛の岩のよう、若さがきわめて広がった蓮華のよう、身体には大きな力・勢力を具えたのは天子のよう、欲するあらゆる吉祥・円満すべてが無尽であることは、夏のガンジス河のように増大し広大になるように！と誓願する。(中略)

非常な積集、守護、増大の三つにより溢れるし、喜びまどわす天子魔などによる法への妨害と、〔自己が〕かつての負債〔あるいは宿業〕を浄めていないのへ〔加えて外の〕敵・盗賊の加害により怒りを起こすようなことについても、善の力でもって無いし、努力なく自在に〔正法を〕行ずるように、と誓願する。短命、多病であり、財宝が無く、魔・敵による加害などが生じたなら、利他を成就することの障害になるのです。身と受用(資財)の円満は、マンジュシュリー(文殊師利)とサマンタパドラ(普賢)などの莊嚴^{※1)}のように、ここにおいても誓願するのであるし、菩薩において受用(資財)が有るなら、布施を施すなど四摂事により衆生利益が増長するのであり、ふつうの者に受用(資財)が有るのとは同じでない。(中略)

そのように思惟する義(こと)すべては法に相応し、法に合致し、障礙が無く、意に思うままに成就するし、『普賢行願讚』^{※2)}などに教・証得の教えを受持することを誓願するように、勝者の教えの宝について講説・修証により為すべきことを為すことができるのと、教えは有情の益・楽の基礎であるので、それに拠って衆生たちへも当座と究竟の広大な利益が成就するものなので、そのようなものを通じて人身の宝を得た者たちが、ムダにならなくて、大きな利益を具えたものが、成就しますように！と誓願するのです。」

※1) *rgyan bkod pa* 内容について明示は無い。これら菩薩の仏国土の莊嚴ということかもしれないが、例えば『華嚴経入法界品』において善財が次々と善知識を訪ねるとき、その善知識は自らの証悟の境界を明らかにするように神変を起こして、その不可思議な莊嚴世界を体得させるという形式になっている。彼ら善知識たちの最後がマンジュシュリー、そしてサマンタパドラであり、彼らの聖なる境地を示すものかと思われる。直後には、『華嚴経入法界品』の要約とも言うべき『普賢行願讚』への言及もある。

※2) v.54 に、「この普賢行願を受持し、読誦し、または教示する者がいたならば、私はそこに果報があることを知る。勝れた正覚に決して疑いを起こさないように。」という。

(3) *dus ma yin pa'i 'chi ba bco brgyad* とある。十八ではなく八であるが、『*Dung dkar tshig mdzod chen mo* (ドゥンカル大辞典)』(2002) p.1086 には、*dus ma lags pa'i 'chi ba brgyad* と *dus min 'chi ba brgyad* という二つの項目がある。前者は、「病人が医療を受けないこと、誤った医療を授けたこと、王の処刑、非人(鬼霊など)により顔色を奪われること、火(火事など)・

水（洪水など）が生じて害されること、凶暴な動物により害されること、断崖絶壁から転落すること、呪いと起屍鬼により害されること」を挙げる。後者は、「老女と寝たこと、健康なのに強力な医薬を用いたこと、古い建物のへりの上で眠ること、鬼霊が多い場所に唯一人行ったりとどまったりすること、病人が医師の言葉を聞かないこと、戦闘すること、できないことの危険に挑むこと、疫病の土地で眠ること」を挙げる。これらが原因となった横死ということであろうか。

(4) 『弁別釈』(51a1-52b6) に次のようにいう—

「概して「勝者の教え」というものは、軌範師ヴァスバンドゥが〔『俱舍論』^{※1}〕に「教主の教えは二種類—教と証得を本体とする。それを受持する者は語る者と修行するものだけである。」と仰ったように、教えは教と証得との二つですが、それを受持するものは、説明と修行の二つの輪です。「だけ」というのは他を排除する言葉です。教えを受持し法を教えることを知らない者これは、哀れです^{※2}。教えを受持することは講説・聴聞・修習を修証するのであり、最初は聞、中間に思、最後に修することにより実践することを言うのであることを、了解しないのです^{※3}。多くの人の喧噪、品物・財物、伽藍、領地、財産がどれほど大きくても、勝者の教えの講説と修証との二つが(51b) 無いなら、それは消え去った^{※4}と同然です。村落の中では空っぽの村落です。勝者の教えは、各人が受持することが必要です。教えの減するの^{※5}も、減びるままに放っておくべきでない。後に従う者たちの食欲が戦乱などを為すなら、減びることを説明しています。昔、善き時代には僧伽の為すべきことは、勝者のお言葉〔である〕契経の宝の中に見てからそのとおりに為す〔。それ〕なら、その後、チベットにおいても、祖父孫の三法王^{※6}などの在世時に、親教師と軌範師たちがそのように戒規^{※7}を制定した。僧伽たちもまたそのように修証する。この頃、この悪しき時代には、頑迷な老人のような一人が心中^{※8}に定めてから戒規を制定する。それは教えを減ぼすことです。教えを受持することではない^{※9}。父子(52a)のように、私たち僧侶は、下には施主に対して固執できない。彼は法の誓いを破った、話を乱した、詐欺するの三つを為した。諸寺院に加害したし、誓いを破棄した。彼の恭侍、奉事をするのを止めたなら、威力は永久に自己において止まる。三宝の御敵の真言を繰り返したなら、〔それはもはや〕懺悔が適わない罪過の一つです。「施主は上師を欺いた。上師は鬼を欺いた。父を子は欺いた。息子を敵は欺いた。」と言うのはそれです。最後は上に行かない。犬を屋上に置いたように、僧侶たちは心が煙の後に従う。この自他両者は衰えていく。上師供養は施主により衰えた。よって、施主たちは上に(52b) 上師、寺院に対して信により恭侍をすべきであり、恩を考えない。僧侶たちは鳥の巣を足に置いたように、心は上に三宝に向ける。正法に対して知は問う。教えに対する善妙な思惟から、説明、修証、聴聞、思惟をすべきであるし、眼は仰ぎ見ることがとても重要です。この頃、僧侶たちは、知が生じたことについて問う。男根が女に出てくる。男の頭より女の頭が高い^{※10}。そのような悪しき時代を見なさい。概して、この如意宝珠のような仏の教えが栄えるなら、有情の幸福がついでに生起すると仰っています。それらを実践するにいたるとき、礼拝および随喜^{※11}までを唱える。」

※1) VIII 39 ; D No.4089 Ku 25a3-4 ; 大正 29 No.1558 p.152b1 ; 和訳 桜部・小谷・本庄『俱舍論の原典研究』(2004) p.355 ; 原典では「勝者の教え」ではなく「正法」である。この二種類の法の区別は『宝性論』にも見られる。cf. 中村瑞隆 ed. pp.35-36 ; 高崎直道 (1989) p.32

※2) 文字が不鮮明であり spug すなわち spug po (寡黙な者) とも見えるが、後への繋

りから *sdug* と理解した。

- ※3) *yin ma gtogs/* (～である以外) とあり、理解しがたい。文脈から *yin ma rtogs/* と読むことにした。
- ※4) *phud* または *phung* とある。一応、*'byid pa* の過去形 *phud* と考えたが、*'bying ba* (沈没する) の過去形 *phung* と読めなくもない。
- ※5) *'jigs pa* (恐れ) とあるが、文脈から *'jig pa* と読んだ。
- ※6) 古代のチベットにおいて、仏教を国教として受け入れて盛んにした *Srong btsan sgampo*, *Khri srong lde'u btsan*, *Khri gtsug lde btsan* という国王である。
- ※7) *chos khrim*s は律儀戒と菩薩戒と三昧耶戒という三律儀と、寺院の清規をいう。
- ※8) *blo phug tu* とある。*blo sbug tu* と読んだ。
- ※9) 以下、表記に疑問が多いので、暫定的な翻訳である。
- ※10) 男性優位という通念をもった年長者が発言しがちなことである。女性の発言権が増すということは、社会が平和で安定すると起こりがちな現象である。
- ※11) *phyag bcas yi rang man chad* 「七支供養」のうち、第四支の随喜まで、あるいはこの極楽願文のそれに該当する部分まで、といった意味である。これは勧請、祈願、廻向以前のより基礎的な部分に該当する。また、第一支の礼拝は別立てのように書かれているが、これは、シャーンティデーヴァ流の菩薩戒を受ける儀軌において、礼拝を先行させてから、加行の儀軌として残りの六支分を行うこととも一致するようである。cf. ツルティム、藤仲『解脱の莊嚴』(2007) p.164
- (5) 仏道修行において人身こそ有暇具足が得られるので、有益なものとされている。cf. ツルティム、藤仲(2005) pp.146-147
- (6) 願文自体の文言は無い。『弁別釈』(52b6-53a2)には次のようにいう—
「第三の因、最上の正覚へ(53a)発心することは、[この『大衆願文』の]ここには[省略されており、直接的な]言葉を取っていないが、最初に動機[である]善良なる思いは加行[※][である]勝れた発心により知を[人為的に]作り出すことそれです。」
- ※) *bsam pa bzang po sbyor ba sems bskyed dam pas* のうち、*bzang po sbyor ba* は *bzang po spyod ba* (普賢行)の誤字として、「思惟は普賢行[という]勝れた発心により」という可能性も考えたが、内容的に分かりやすくなるわけでもない。『大衆国土誓願の註疏』p.251に *sems bskyed bsam pa bzang po re la blo sbyor gyis* (発心[である]善良な思惟一つについて修心すべき)という類似した記述が見られることから、現在の表記のままに翻訳した。
- 『大衆国土誓願の註疏』p.250には次のようにいう—
「第三の因、助け[である]最上の正覚へ発心することは、ここには本願の科文を別に説かれなかったが、上の廻向の中に含まれているし、前に加行[である]勝れた発心の個所のまとめほどを説明したそれです。けれども、実践において拵げたならば^{※1)}、面前の虚空に無量光[仏]など勝者およびその子(菩薩)たちと上師[である]持金剛たちが現前に居られる御前にて、「私は大乘の発心の律儀を頂こう」と思って、「正覚の座(菩提道場)に至るまで」など[という発心の儀軌の経文]から、帰依および律儀を三回、または「仏・法・衆」[という三帰依文]を三回により^{※2)}律儀を受けるし、「最高の菩提心」なども述べよう。そのように、毎日また発心を受けたなら、加行より生じた発心が生じ、さらに増長することになるし、不可思議な福德を積むのです。」(以下、省略)

※1) 以下は、罪悪を浄化し福德を積む加行としてのグル・ヨーガ、あるいは資糧田儀軌と一致した内容でもある。

※2) 属格 gyi であるが、文脈より具格 gyis に読む。

『大楽国土誓願の註疏』p.252 は末尾近くに、「この国土の諸菩薩は極楽へ生まれるよう誓願するし、そこに生まれることを説かれているので、この発心について継続的に努めることが重要です。」という。ここと同じくツォンカパの『極楽願文最上国開門』にも正覚への発心が極楽往生の第三因とされるが、その典拠については、『無量寿経』の第18願（梵，チベット）に他世界の菩薩が正覚へ発心して名号を聞き、心が澄浄になった場合、そして第19願（梵，チベット）に、名号を聞いて往生するよう発心し、善根を廻向する場合に、極楽へ往生できることを説かれている部分が、指摘できる。

(7) 『弁別釈』(53a2-56a6)には次のように説明し、五項目を立てている。下線部は願文自体の言葉である—

「第四の因〔である〕善根を自他の一切有情が極楽に生まれる因として廻向するのです。それもまた廻向すべき何らかの善根が有ることが必要です。よって、最初、福德の広大な資糧を積むことが必要です。どのように廻向し、誓願するかには五つ—

- 1) 正尊について※1) お顔を見ることを誓願する
- 2) それの妨げ—貪りの執着を断つことを誓願する
- 3) 後〔生〕を中心にして誓願する
- 4) 当面の欲する義（ことがら）について誓願する
- 5) ついでに終わりに為すべきことを説く

〔第一；おもにお顔を見ることを誓願する〕

私自身と私に対して善し悪しの業の関係をを持った〔有縁の〕者です。法の関係は善い(53b) 関係〔であり〕、因の関係これは何であるかを知らない※2) と、仰っています。悪い関係は、因はものを奪うこと、殴ること、聞き難いことを述べることを、害を加えることなどです。それもまた、善いものを導いて、悪いものを捨てるわけではないので、関係を持った者すべてです。〔現世〕ここから住しないで死去した直後にです。それもまた、最初、〔死の前兆として〕身体が病に罹った。体力が適わなくて寝具の下に墜ちる。食べる食もまた味がしない。柔らかな衣も棘より粗い。座席もまた岩のように堅くなった。死において泣いても、死なない方便は無い。罪悪を持った〔悪〕人を、功績ある者が手に入れる〔すなわち捕まえる〕のが必定なのと似ています。死なないなら〔いいのに〕と思っても、〔この世に〕とどまる自由は少しも無い。一生(54a) 積んだ財産について少しも運んでいく自由は無い。別れがたい朋（とも）、親友といっしょにいる自由は無い。知らない国に唯一人彷徨うことが必定であると知る。彼はかつて死を憶念しなかったから、正法を為したことにより恐怖なくいい〔という〕自信が無い。そのとき眼により色は眼翳しか見えないし、耳により声は全く感受されないうとき、命の要（かなめ）の三百六十が断たれた〔断末摩の〕感受により悶える。このとき錯乱して、大きな罪悪の生活をかつて為した罪※3) を憶念して、激烈な苦が生ずるし、悲鳴などをあげる。凶暴な姿を持った閻魔の従者などが見えるので、少し悶絶する。その場合に現在、何を数習したのか(54b) それこそが必ず心に浮かぶ。罪悪ある者は罪を為したことの現れと、※4)それが或るときに〔ニンマ派の〕ゾクチェン（大究竟）の或る老僧〔すなわち〕多くの水食供※5) を施す者はサムバハラ〔の真言〕を唱えて廻向する姿勢をしてから死んだ。或る顕教学者が〔問答において〕「どのように有法は」といって論

争の体勢をしてから死んだ。或る工人は縫い物の部分を仕上げる姿勢をしてから死んだのなど、現法〔すなわち現実に見られること〕になったものは多い。同じく現在、極楽国土に生まれる〔という〕誓願を立てて、それを数習することが有る者は、そのとき憶念が来る。憶念した直後、断末摩の苦が無くて、〔中有での〕迷乱の現れが浮かばずに^{※6)}、主無量光の変化である無量光仏が比丘の僧伽の(55a)眷属により囲まれたものが、面前の虚空に虹と光の領域に現前に出現なさるのが見えて、この善根により自他すべてがそのように現れが迷乱せず、主およびその眷属の相好の妙顔を拝見できますように！相好のお顔それが見えたことにより、意(こころ)喜びうっとりとし^{※7)}、現れめでたいしみじみとし^{※8)}、明知〔精神〕が喜々として死の苦が無いように！

それから死去して中有の現れが浮かぶと間近に、菩薩〔である〕文殊、金剛手、観自在、地藏などの八兄弟〔である〕八大菩薩^{※9)}が、〔すなわち〕神変の力でもって面前の虚空に出現なさり、(55b)極楽に往く道を示し、虹の光の盛んな宮より音楽をともなったものが、お迎えの姿で道を引導してくれますように！

この方軌は、尊者リンポチェ・ロサンタクペーパル(ツォンカバ)が造られた『極楽願文』にも明示されている。〔すなわち〕「いつか寿行を捨てた〔なら、眷属衆の海により囲まれた無量光が視界に明瞭に見えてから〕」^{※10)}などにより説かれている。

それもまた、いつの時かかつての〔業の〕投擲が完了して、〔今生の〕寿行〔すなわち寿命の潜在力〕を捨てて、死ぬのなら、海のような眷属〔である〕比丘の僧伽衆により囲まれた変化の無量光仏そのものが、視界に現前に明らかに見えて、そのとき勝者およびその眷属に対する浄信と、有情を縁ずる大悲^{※11)}でもって私の(56a)〔心〕相続を充たしますように！

信および対境を忘れずに死去してから迷乱の現れ、中有の現れが浮かんだ直後に、八菩薩により誤りなき善き道を教えられて、極楽の蓮華から化生して、自性寂靜・安楽の地に住しなくて^{※12)}強力な悲愍でもって変化を無数に分けることにより、穢土の衆生たちを導く^{※13)}ことができますように！という。

そのようにお顔を拝見することは、勝者の悲と自己の信解・尊敬との二つ〔の力によって〕です。上師ツァンパ・リンポチェ(mTshams pa rin po che)^{※14)}を信ずるZla chu岸^{※15)}の多くの老いた男女は死ぬときもまた、「いま上師リンポチェが出現なさっている」と言って、喜び、喜々として死んだのが多い、と仰っている。(56b)

- ※1) gtso bor とある。『大楽国土誓願の註疏』の科文に「無量光のお顔を見ること」というのを参照した。しかし、第五の項目で zhar byung (ついでに) とあることから、「おもに」「中心として」という意味の可能性も考えられる。
- ※2) 果を結んでいない境位において因を凡夫はまだ直接的に知ることができない、という意味であろう。
- ※3) sdig chen tsho sngar byas kyi sdig pa のうち、tsho (染料、煮えた) は、'tsho (生活、生計) の誤字ではないかと考えた。
- ※4) この話は『大楽国土誓願の註疏』p.255にも出ている。
- ※5) chu gtor は、銅皿などに水、乳などと団子などを入れた供物である。
- ※6) 極楽往生の前に中有が有るか無いかについては、東アジアでは『阿弥陀経』や『無量寿経』の「即得往生」の文言から無いと考える傾向にある。中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究」(『佛教大学総合研究

所紀要』18, 2011) note 19 を参照。

- ※7) ya le とある。『蔵漢大辞典』には ya le yo le に「漫然」といった用例がある。『大楽国土誓願の註疏』p.254 の該当個所には yal le とあり、『蔵漢大辞典』には yal le yol le について「漫然」「茫然」といった用例がある。いずれも否定的な文脈での用例が見られるが、ここでは心喜ぶ場面であるから、このような訳語を選択した。
- ※8) tha le とある。『蔵漢大辞典』に見られない。『大楽国土誓願の註疏』p.254 の該当個所には dung nge とあり、『蔵漢大辞典』の dung nge ba 「切々とした」という訳語を参照した。
- ※9) 訳註9を参照。
- ※10) cf. bKra shis 編 *bDe smon phyogs bsgrigs. stod cha* (祝詞集上巻), Si khron mi rigs dpe skrun khang (四川民族出版社), 1994, p.187 l.3; 和訳 ツルティム・ケサン, 小谷信千代「チベットの浄土教—民衆の信仰—」(『浄土仏教の思想 三』1993) p.255
- ※11) 有情を縁ずる悲, 法を縁ずる悲, 無所縁を縁ずる悲という三種類の悲は、『無尽意所説経』(D No. 175 Ma 132a3-5; 大正 13 No.397 (12) 『大方等大集経無尽意菩薩品』200a) に各々, 初発心の菩薩, 行に発趣した菩薩, 無生法忍を得た菩薩のものとして出ており、『大智度論』や『入中論』など中観派の論書, あるいは『莊嚴経論』など唯識派の論書にも言及される。
- ※12) 無住涅槃への言及である。悲ゆえに涅槃に住しないのである。
- ※13) このような内容については、『普賢行願讚』v. 60, あるいは『無量寿経』(梵本)「東方偈」19-20 偈に説かれている。cf. 中御門敬教「往生後論攷」(2004) pp.39, 44-45
- ※14) 未確認。言葉自体は、「結界をしている宝師(活仏)」を意味する。Tibetan Buddhism Resource Center で人名検索すると, sMan sdon mtshams pa rin po che Karma Nges don bstan rgyas (19-20c. カルマ・カギユ派の人) が出てくるが, この人は1942年に94歳で亡くなったとされており, ここで没後が言われているのと合致しない。
- ※15) 現在の青海省に発して, 南西方向に流れる。チャムド(昌都)を通して, やがてメコン河になる。この西岸がチベット民族の多い地域である。
- 『大楽国土誓願の註疏』p.253にはまず,
「チャクメー・リンポチェの母と眷属・従者などもまた極楽に生まれた経緯のようにすることが必要です。」

と述べてから説明に入っている。そして, ここからの項目立ても少し異なっている。すなわち,

- 1) 臨終において無量光のお顔を見ることを誓願する
- 2) 仏の名号を受持したことの利徳を説明するのを通じて結論する
- 3) 誓願の成就に随順することになる真実語, 陀羅尼, 真言などにより加持する

という三つである。

そして『大楽国土誓願の註疏』p.256には教証として次のようにいう—

「勝者ツォンカパ^{※1)}は「いつか寿行を捨てたなら」などというのもこれと等しいし、『光経 'Od mdo』^{※2)}に「彼らは死ぬとき近くに住するならば」など広汎に説かれたし、『普賢行願讚』^{※3)}に「私は臨終になったなら」などというのと、『篋〔莊嚴〕経 mDo za ma tog』^{※4)}に, お言葉の六字のマニを聞いたかぎりの者たちは死ぬとき, 十二仏と八菩薩により引導されて極楽に往くことを, 説かれている。それもまた, 無量光の発心・誓願と自らが資糧を積み, 障礙を浄化し, 信解・尊敬をなした力であるのを知ることが必要です。」

※1) 上記『弁別釈』の訳註を参照。

※2) 梵文, チベット訳『無量寿経』の第18願(魏訳第19願)の取意。'Od mdo は, チャクマー著『大楽国土誓願』の奥書(cf.『浄土教典籍目録』p.114), ジクマーリンバ著『極楽国土の荘厳』の奥書(cf.同上p.89)に見るように、『無量寿経』を意味する。なお『阿弥陀経』(『浄全』23, p.347)にもこれと類似した表現がある。

「近くに」というのは「そのもとに」「その面前に」という意味である。

※3) v. 57; cf. 中御門敬教「往生後論攷」(2004) pp.36-38

※4) Karaṇḍavyūha. D No. 116 Ja 211a6-b1; 大正 20 No. 1050 『大乘莊嚴宝玉経』 p.51a の取意。この法門を聞き, 世間に顕わにするなら, 安樂を得るし, 五無間罪を消す。臨終時には十二如来が来迎して, 恐れを除き, 極楽往生のために様々な道を示すなどというが, 八菩薩による引導の記述は出ていない。十二如来は別々の如来であるが他方、『無量寿経』における十二光仏は阿弥陀一仏の徳を区別したものである。

内容に関しては, 廻向からは専ら利他行に入る。これは『普賢行願讃』の七支供養の構造, あるいは『往生論』の五念門の構造とも共通している。すなわち, 『普賢行願讃』は, 陳那釈によれば, 七支供養(敬礼・供養・懺悔・随喜・勧請・懇願・廻向)の七つの章と, その後に続いて廻向に関する第8章「廻向の区分」, 第9章「廻向の究竟」, 第10章「廻向の善」となっている。両者ともまずは功徳を造り, 後にその功徳の廻向を救済行とするのである。『往生論』では, 五念門(礼拝, 讃歎, 作願, 観察, 廻向)の最後が廻向門となっている。武内〔1993〕p.178には, 「五念門の素地になる組織として, 古くから指摘されているものに普賢の十大願がある」とあるように, 華嚴と浄土思想の親しい関係性を示すものとなっている。cf. 武内紹晃「世親一唯識思想と浄土論一」(『浄土仏教の思想三』) p.179; また陳那著『普賢行願讃釈』の科文には, vs. 57-58の個所で往生人の往生後の行相として三種類が説かれ, 「三種の廻向」と呼ばれている。この特徴的な理解は, 先行すると思われる世親著『往生論』の「五念門廻向」の記述と一致している。

(8) 梵文, チベット訳『無量寿経』第18願(魏訳第19願)の内容に対応する。cf.『浄全』23, p.241

(9) シャーンティデーヴァ著『集学論』(Bendall [1977] p.175; cf. D. 東北 No. 3940, Khi. 98b2-4; 大正 32 No. 1636 p.109c27-p.110a3)には, Bhaiṣajyaguru-vaiḍūryaprabha-sūtra (薬師瑠璃光王経)(cf. 玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德経』大正 14 No. 450 p.406b6-16)を引用しており, そこでは, 薬師如来の名号を受持した者は極楽往生する。そのとき八大菩薩が来迎するということが, 説かれている。八大菩薩は文殊師利, 観自在, 得大勢, 無尽意, 宝壇華, 薬王, 薬上, 弥勒であり, 阿弥陀仏の両脇侍が含まれている。

八大菩薩は本来, 薬師如来の東方浄瑠璃光世界に関係するのに, それが臨終時に来迎して, 極楽浄土への引導することは一見奇妙であるが, G. ショーベンがいうように, 極楽往生が目的として一般化されていたことを意味する。また, この話は他にもシナやチベットに伝えられている。漢訳では『同経』異本の『灌頂百結神王護身呪経』巻第四(cf.『浄土教典籍目録』p.8), 不空訳『普賢菩薩行願讃』(大正 10 No. 297)の最後での『八大菩薩曼荼羅経』末による記述がある。チベットでは著作にも多く登場する。例えば, Tsong kha pa (1357-1419. ゲルク派)著『最上国開門』(cf.『浄土教典籍目録』同p.91), 同著無題の極楽願文(cf.同上p.169), Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me (1762-1823. ゲルク派)著『主無量光に依るグル・ヨーガ 最上国開門』(cf.同上p.64), Ye shes rgyal mtshan (1713-1793. ゲ

ルク派）著『所作タントラ蓮華族の正尊無量寿主の成就法および断食の作法』（cf. 同上 p. 125）, 'Jigs med gling pa（1729/30-1798. ニンマ派）著『極楽に往く儀軌—無量速疾道』（cf. 同上 p. 97）, Khrag 'thung bDud 'joms rdo rje（19世紀. ニンマ派）著『浄らかな顕現から無量光が直接に説かれた誓願』（cf. 同上 p. 77）, Zhe chen rGyal tshab（1871-1926. ニンマ派）著『極楽願文』（cf. 同上 p. 105）などである。

チベットではタンカや木版画に八大菩薩像が描かれることが多いが、これらはいずれも中心に阿弥陀如来を置き、その八人は観自在、金剛手、文殊、弥勒、普賢、虚空蔵、地藏、除蓋障となる。中央の阿弥陀如来は、如来形の無量光、莊嚴した菩薩形の無量寿のいずれか一尊を、楼閣の中に大きく描き、阿弥陀の台座にはクジャクを描くこともあれば、極楽の蓮池から生じる蓮茎の上に阿弥陀を拜することもある。cf. 頼富本宏『密教仏の研究』（1990）pp. 607-625；上の訳註に出した『弁別釈』をも参照。

(10) 『弁別釈』（56b1-62b6）に次のようにいう—

「第二：〔無量光仏のお顔を見ること〕その妨げ〔である〕貪欲・執着を断つよう誓願すること

それもまた、輪廻の上下のどこに住していても、苦を楽だと慢じて※¹、それにおいて一度上向きになったこと※²以外は少しも無いのです。『入行論』※³に「そのようにきわめて苦であるが、自己の苦が見えない者—苦の河（暴流）に住するこれらは、ああ、憂うべきである。例えば、或る者はたびたび沐浴をして、たびたび火に入る。そのように大きな苦しみに住していても、自己は楽だと慢ずるように。」と説かれているとおりです。そのうち、三悪趣の苦は忍受しやすさが少しもないが、天と人の見せかけの安楽・幸福も無常であり、(57a) 非堅固に変わるのは夢の現れと似ていて恒久でない。権勢・富・繁栄のどのようなものが揃っても、最終的には転落する。繁栄の最後は衰退、出会った最後は別離、生の最後は死を越えていない。それはほとんどが後の猛烈な苦の因になる。

要するに、輪廻は上下のどこに生まれても、苦の自性、苦の錯綜、苦の送迎、火の穴、羅刹女の島、利刀の刃、毒と刺の断崖絶壁のようなものなので、この善根でもって自他の有情すべてが、その輪廻に恐怖し怖れる心が生ずるように！それもまた、輪廻の住処の苦と極楽〔浄土〕の(57b) 安楽・幸福との二つをたびたび思惟し、この輪廻から離脱してかの国土に生まれたならいいのにといて、欲求（願楽）することが重要です。輪廻のこの住処について長い間、思惟するなら、正等覚者の一切相智の智慧によっても見られるものになっていない無始〔の過去〕から現在までに、この輪廻において苦を受用しながら時は長い。すなわち※⁴、「骨肉を積んだなら、世間の広さ※と等しい。膿血を積んだなら、大きな海ほど。残した業を積んだなら、思議を越えている。」というのと、『宝徳蔵般若経』※⁵に「地獄に住する者は煮えた銅液を飲んだ。餓鬼（58a）の身になったものは膿血、不浄（糞尿）を食べた。すべてにおいて苦の因から涙を流す。方向の辺際が至った海より多い。」と仰ったように、生類は友・兄弟に生まれた者の〔例えば〕手足のようなものを一方にまとめても、スメール山と等しい。地獄に生まれてから自由なく、煮えた鉄の液を飲んだのも〔この娑婆世界のガンガなど〕四方の大河より勝っている。餓鬼に生まれてから、膿血と不浄を食べたのも、大きな海より勝っている。人に生まれてから、口に食べ物と背に着物を獲得しなくて泣いた涙も、〔このジャムブ洲を取りまく〕周辺の海よりはるかに多い。今後もまた、道の行持を如理に為さなかったなら、そのようになるから、この善根により、それに対して強力な厭離が（58b）生ずるように！今回、仏の教えの残った御世※⁶に生まれたこの時において

幸せ者として充分です。

輪廻において〔旅立つときの〕お別れの挨拶^{※7)}ができることは、どうしても必要です。人から人に生まれたことはきわめて難しい。もし生じたとしても、生老病死の無数の苦を経験することと、さらに有る者は有ることの苦しみ、〔例えば〕生活養育できない、敵により破壊されてしまう、王により奪われてしまうと思う苦しみです。無い者は無いことの苦しみ、〔例えば〕口に食べ物を得ない、背に着物を得ない苦しみ。権勢の者は権勢の苦、〔例えば〕さらに上に取りられる、自己が下に落ちると懼れる苦。劣った者は劣ったことの苦、〔例えば〕すべての者により奪われる、破壊される、殴られるとの三つ。悪言、悪語などにより苦悩する。今日明日、事変、(59a) 謀略、敵により食われてしまう、権勢により剥奪されてしまう。もしそれらが無くて、当面安楽が有ると考える^{※8)}、自由が有る者には、苦しみがある。「円満を具足した者には慳貪がある」^{※9)}と説かれているように、権勢・富・繁栄の因を具足した者は、地位、権益などすべては最後に苦のみの因であるし、悪しき濁った時代のなかでもきわめて濁ったこの時代には、様々な障が多い。人と天の安楽・幸福だと見えているこれは、毒が混じった食べ物に善し悪しの差別は無いのと同じく、欲の思惟が毛の先の分ほども無いように！

概して、この生活の物品、受用(資財)、親族などに執着することは、豚が不浄に(59b)執着するのと似ている。執着はどんな価値があるのでしょうか。大悲を持った教主は、転輪王の統治を捨て置いて苦行に往かれた。ウギャン法王(パドマサムバヴァ)^{※10)}はインドラプーティ王の統治を唾液の痰のように棄てて、八屍林に禁戒の行に往かれた。主尊・天尊師^{※11)}デーパムカラ〔・シュリージュニャーナ、すなわちアティシヤ〕は、サホール〔国〕の善吉祥王の円満一〔東の〕シナの君主^{※12)}と等しいものを、放っておいて、家から家無きものに出家した。

南方のスヴァルナ・ドヴィーパ(gSer gling, 金洲)のケミナ^{※13)}大王〔すなわち〕無比なる者も統治を放っておいて剃髪し、〔衣を〕壊色に染めて、沙弥の末席に座られた〔。それ〕なら、私たちの眷属〔である〕虫の巣のようなものについてあきらめないわけは何も無い。けれども、輪廻の苦について(60a)思惟しなかったことと、勝者(仏天尊)のお言葉を信認しなかったことに由るのです。勝者のお言葉を信認したなら、このようなものであることはありえない。

「そのとき、ニャクケ^{※14)}が鼻を削られることを聞いたので、ほとんどの者が牧草地^{※15)}などを放っておいて逃げることを思う」と仰っている。同じく親族と食べ物、財宝もまた無常であり、和合した友もまた巡り巡って敵や友なので、それらのどれについても無常であり、幻と夢のようものです。目覚めた現在、それらはどこに有るかの方向を誰も知らなくて、至ることについても分からないので、執着のとらわれは毛ほども無いように！今から執着を断たなかったなら、明日或る上師が、死体が青くなってから、〔葬儀において引導を渡すとき〕「執着するな」と言うとき、何に役立ち、(60b)何を知るのか〔。何にも役立たないし、何も知らない〕。現在から自己に数習があったなら、中有の識は水中の皮^{※16)}と似ているので、変えやすい。けれども、ほとんどの者は因は内に行くこと^{※17)}ができなくて悪処に生まれることが多い。

※18)かつて或る比丘が良い鉢に執着して、臨終に看護者に対して「持ってきてください」といったが、〔看護者〕彼は与えなかったので、〔その比丘は〕悪心が生じて死んだ〔。その〕直後に鉢に執着して、鉢の中に蛇として生まれた。寒林において火葬するとき、仏が鉢

から蛇を出したので、森の中に入った。怒ったので口から火が燃えた。森が焼けただけで、蛇もまた焼け死んだので、刹那に地獄に生まれて、身を焼かれた。一時に三つの火が燃えた。そのとき世尊は、「比丘たちよ、すべて怖れなさい（61a）。渴愛により資具のために悪趣に生まれたから、密林における怒りの火と有情地獄の火と寒林におけるふつうの火により燃やされたすべてについて、厭離しなさい。よって、比丘は資具に特に執着を生ずべきではない。生じたものは全く捨てるべきです。捨てていなかったなら、罪過を持った者になる。」と仰った。

※¹⁹ また或る比丘には良い緑宝玉が有るの〔で、それ〕へ執着して、死ぬとき、承知している比丘たちが〔その宝玉を〕探して獲得しなかったので、一人の比丘は、「彼は死ぬ前にその緑宝玉へ執着が大きかった。そこで、〔亡くなった〕この人の頭は南方※²⁰ に向かっているの、水源を探そう。」と言った。探したので、或る蛙が手足の（61b）下に押さえているのが見えたので、すべての者が取ろうとしたが、取れなくて、蛙を仰向けにひっくり返して、熱湯を注いだから、熱さから捨てた、という。

かつてデブン〔大寺〕の或る僧侶には多くの銀が有ったのへ、臨終時に執着して、他に与えることができず、居室の壁の隙間へ隠して死んだので、〔彼は〕蜘蛛に生まれて銀の上に行き来したので、銀がカチャという音を立てた。二人の〔僧侶〕仲間が感知して探したので〔、隠された銀を〕得た。蜘蛛の付いた黒い銀の塊はラト・リンポチェ（Ra stod rin po che）※²¹ の御前に運んでいった、という。また或る比丘は法衣に執着して〔死んだ後〕、法衣の中に蛇として生まれて住んだという。

或る女は、自己の身体に（62a）執着して、死んだので、その身体の中に毒蛇として生まれることと、こちらに家畜に生まれること。或る家長は金に執着しながら死んでから、まさにその金にとぐるを巻く蛇に生まれた。〔西チベットの〕ラト（La stod）の或る子どもは、投石帯に執着して死んだので、ふとんの下に石蛇になった、という。さらに悪鬼に生まれるなど、際限が無いのです。

よって、執着したものに対する囚われを断つことが重要です。各自が分と国、氏族、家、居室、テント用毛布などは夢の対境の住居のように、無常であり、諦（真理）として成立していない自性だと知りますように！

解脱のとき〔実体が〕無い〔と証悟される〕輪廻の大海、猛烈な牢獄に墜ちて〔も〕、大きな過失を捨てた人は、牢獄から脱するのと同じく、西方（62b）の極楽国土に、振りかえらずに逃れますように！

概して、極楽願文と遷移（ポワ）の伝授をいただく場合、家畜はできるなら、乳を溢れさせるとよい※²²。どんな縁が生じて、〔臨終のとき〕振り返ることはかなわない。振り返ってしまったなら、かつて或る上師が浄土に往こうとされていたとき、愛好する音楽があり、他者〔である僧侶〕が後方でうち鳴らした。それで、上師は振り返ってしまったので、悪鬼に生まれた、という。

ゆえに、執着の囚われすべてを断って、驚が畏の中から離脱したのと同じく、西方の虚空に鷲鳥（ハムサ）の王が飛ぶ※²³、そして白衣が風により運ばれるように、無数の世界を越えて、刹那、須臾ほどの時に往って、極楽に至りますように！、という。（63a）

※1) rlom pa（慢）は五毒（貪・瞋・癡・慢・妬）に含まれるが、実体視することをも意味する。cf. 『入中論自註釈』 ad MA VI 26（Poussin ed. p. 107 l. 19–p. 108 l. 6；D No. 3862'A 255a1-2；和訳 小川一乗『空性思想の研究』1976, pp. 92, 98；ナーガー

- ルジュナ著『宝鬘』RA IV 62cd (Hahn ed. 1982, p.116-117; 瓜生津隆真『大乘仏典 14 龍樹論集』1974, p.294; ツルティム, 藤仲『中観哲学の研究 VI』(2009) pp.354, 357
- ※2) kha spor re byas pa とある。spor ba (追加), 古い用例の spo ba (変換, 移転) の可能性もあるので, 暫定的な翻訳である。
- ※3) IX 164cd-165; D dBu-ma No. 3871 La 37a5-6; 和訳 金倉円照『悟りへの道』(1958) pp.207-208; ソナム・ギャルツェン・ゴンタ, 西村香『チベット仏教 菩薩行を生きる』(2002) p.198; 暴流について通常は, 貪欲・有(生存)・見・無明という四つが挙げられる。cf.『俱舎論』AK V 37; 和訳 小谷信千代, 本庄良文『俱舎論の原典研究 随眠品』(2007) pp.175-176
- ※4) 未確認。※には ltos (見かけ) とあるが, 『大楽国土誓願の註疏』p.261 での同じ引用に gtos とあるのを採る。ナーガールジュナ著『親友書簡』(vv. 67-68; D No. 4182 Nge 43b6-7; 和訳 瓜生津隆真『大乘仏典 14 龍樹論集』(1974) pp.333-334; 北畠利親『龍樹の書簡』(1985) p.234) にもこのような内容があり, ここでは「各々の自己の骨の塊はスメール山と等しいほどを越えてきた」などともいう。また『大楽国土誓願の註疏』pp.260-261 には『親友書簡』のその箇所と『正法念処経』を引用している。これらの内容は初期経典に始まって, チベットの道次第文献にも日本の『往生要集』にも出てくる。
- ※5) 現行の同経に未確認。Yon tan rin po che'i mdzod は通常『宝徳蔵般若経』を意味する。
- ※6) lhag zhabs は辞書に確認できない。lhag pa (残り), zhabs (御足) より文脈を考えて仮に翻訳しておいた。
- ※7) phyi phyag は単なる「お別れの挨拶」よりは重い内容である。『蔵漢大辞典』によれば, 他国に往くとき自己の師に対する礼拝である。ここで, この挨拶はどうしても必要だという書き方の背景としては, 律の規定において, このような旅行は僧侶にとって好き勝手にできることではなく, 師の許可が必要とされることをも考えるべきであろう。
- ※8) rtsis gyis dab? (rab?)/ とある。暫定的な翻訳である。
- ※9) 出典未確認。
- ※10) シャーンタラクシタに同行して, チベットに真言密教を伝えた大成就者である。この願文の著者や註釈者たちの所属するカギェ派, ニンマ派あるいは民衆の間では, 埋蔵経典の開祖, あるいは後で言及するように, 無量光仏, 観自在菩薩の化身として尊敬を集めている。日本での弘法大師や役行者のような存在である。『大楽国土誓願の註疏』p.265 には, 「教主〔釈迦牟尼〕が大悲により統治の円満すべてを唾を吐き捨てるように棄ててから成仏なさったことと, ウギェン・リンポチェがインドラプーティ大王の統治を棄てて持金剛〔の位〕を獲得したことなど, 昔の人たちの行動を見なさい。」という。中御門論文の訳註 22 を参照。
- ※11) lHa gcig (天尊) は王族出身の僧侶に用いられる称号である。
- ※12) stong 'khun. 辞書類に出ていないが, lCang skya rol pa'i rdo rje はこれが漢語「東君」の音写であることを述べている。cf. ツルティム, 藤仲『菩提道次第大論の研究』(2005) p.306
- ※13) ke mi na (?) とあるが, 辞書類に確認できない。固有名詞と考えて暫定的な翻訳と

した。スヴァルナ・ドヴィーパは現在のスマトラ島である。アティシャが菩提心の教えを受けたことから最大の恩師と考えたセルリンパ・ダルマキールティもこの島の人である。彼の著作として『現観莊嚴論』や『入菩薩行論』に対する註釈書がチベット大蔵経に伝えられているように、インドとの交流があった。西暦7世紀後半、スマトラ島に成立したシュリーヴィジャヤ王国では大乘仏教が栄え、9世紀前半にはボロブドゥール寺院が建立された。

- ※14) nyag sked 『藏漢大辞典』には現在の四川省チベット族自治州の地名として出ている。話の出典を含めて分かりにくい。『大楽国土誓願の註疏』 p.266 には、「昔、ニャクが皇帝により迫害されるのを恐れて、土地を棄てて逃散に堪えたようなものです。」という。その地域の民衆のことをいうように思われる。
- ※15) sbra gzhis. sbra は放牧を行う草地、gzhis は莊園を意味する。
- ※16) 乾燥した皮革は加工しがたいが、前もって水につけておくと、柔らかくなって加工しやすいということであろう。
- ※17) rgyu nang nas とある。nas は通常、従格を表すが、この『弁別釈』には於格としても用いられているようである。自発的なものが何もない、または教えられても身につかない、といった意味であろうか。
- ※18) 出典未確認。これら因縁話は、以前の個所と同じく、有部の律文献やそれに倣った文献に頻出する。
- ※19) 出典未確認。
- ※20) s-hod phyogs とあるが、lhod phyogs の誤表記であろう。
- ※21) ラサ近郊のラト・デーチェンリン寺の活仏をいうのであろう。
- ※22) 重要な放牧の作業であるが、放置しておいてよいという意味か、または、供養のために豊富にすべきだという意味か。「できるなら」の言葉があるので、後者の可能性が大きいように思われる。
- ※23) 'ma brgyad? ba'i とあり、読解できない。『大楽国土誓願の註疏』 p.274 に 'phur ba とあるのに従う。
- (11) bzod blag med とある。『藏漢大辞典』には bzod glags med の表記で出ており、「耐える手だてが無い」と説明している。『大楽国土誓願の註疏』 p.259 には、「耐える手だての望みが無い」という。
- (12) 『俱舎論の自註釈』 AKBh (D No. 4090 Ku 159a5-6; P. Pradhan 1967, p.337; 大正 29 No. 1558 p.61a21-22; 和訳 山口・舟橋『俱舎論の原典解明 世間品』1955, p.473) に、「そのとき五濁すなわち命濁と時の濁と煩惱の濁と見の濁と有情の濁が、きわめて勝っている」という。増劫においては厭離の心が生じないので、諸仏は出現なさらない。減劫のうち、人の寿命が八万歳から百歳まで減少するとき諸仏は出現なさるが、百歳以下になると、五濁があって諸仏は出現されないとされている。『阿弥陀経』の末尾では、五濁の時代に娑婆世界において釈迦牟尼が成仏されたことは驚異であるとシャーリプトラが釈尊に申し上げている。cf. 『浄全』 23, pp.352-353
- (13) 毛ないし毛端は、毛先で掬いあげた水量と、大海の水量との対比において、仏典には良く出る。例えば、『無量寿経』では、浄土の声聞が無数であることを説く箇所に出る。cf. 『浄全』 23, pp.266-269

参考資料

マチク・ラブキドノマ (Ma gcig lab kyi sgron ma. 1031-1129) 著『誓言二十一 *Sras rgyal ba Don grub la mKha' 'gro'i gsang tshig tu gdams pa Dam tshig nyi shu rtsa gcig pa*』(カルマ・チャクメー著『虚空の法, 大楽国土を成就する灌頂を整然と配置したもの *gNam chos bde chen zhing sgrub kyi dbang 'grig chags su bkod pa*』東洋文庫蔵チベット蔵外文献 Ref. No.701 (Folios. 1a1-17a4) のうち, 3b5-5b4 に引用されたもの)

「仏を速やかに得たいと欲する者には、仏の (4a) 清浄な国土世界一つへ誓願を立てることが必要である。異なった国土世界〔すなわち〕数えきれず、述べることにより限定することが難しい〔諸々の〕ものが有るさまを説かれてから、そのうち極楽〔浄土〕以外の他の広大な国土世界に生まれるには、〔煩惱と所知の〕あらゆる二障を断ってから、第八地以上を得ることが必要である。中〔程度〕の国土世界に生まれるにも、微細の〔うちでも〕微細なあらゆる煩惱障をも断ってから、第一の修道以上を得ることが必要である。最低の国土世界においても我執を根本から断って、無我、法性の諦が見える道(見道)を得ることが必要である。見道を得ていない間に誓願を立てても、成就しない。見道を得ていなくても、誓言(三昧耶)、学処の(4b)戒について、微細の〔うちでも〕微細なあらゆる過失も起こっていないし、罪悪の懺悔^{※1)}と〔諸々の〕善品の修証と誓願に努めるなら、或る者は都率天などの小さな国土世界に生まれうることもある。それもまた難しくある。それら国土世界としては、煩惱の集まりに住するふつうの異生(凡夫)の生まれる処ではないので、いまなお誓願を長らく立てよう。よって、煩惱を持ったふつうの人(ブドガラ)が、仏の国土に生まれうるわけではない。けれども、無量光仏の誓願の力により、かの極楽の国土世界に生まれることは、主無量光こそが約束なさったことであるから、(5a)極楽に生まれる誓願に、すべての門(面)より努めることが必要である。それもまた、懷疑と疑いと懈怠と取捨が無く、決定知と激しい精進を通じて、極楽国土の莊嚴と功德を憶念して、誓願を立てよう。極楽の国土世界は、他の仏陀の国土世界より特別に勝ったものである。それはなぜかという、極楽〔世界〕には、ふつうの者〔すなわち〕煩惱を有する異生(凡夫)の人(ブドガラ)たちも生まれうるので、勝ったものであるのと、そこに生まれてからも、およそ思う欲することすべても思う直後に成就するの^{※2)}であるし、微細な煩惱障ほどによっても染まらないのと(5b)、さらにまた、どの欲する仏の国土世界へも行くことができるので、勝っているのと、他の国土世界より成仏するのも速いので、勝っているのと、それらなどの不可思議な功德を具えた極楽より、受けることが近い国土世界は他にないので、極楽に生まれる誓願に努めることが、重要である。」

※1) dag shan? とあり、読解できない。文脈より gshog pa と読んだ。

※2) 'grub pa 'grub pa と繰り返されている。不必要だと思われるので、一つを削除した。「悉地が成就する」ということも考えられなくもないが、直前に「およそ思う欲することすべて」という言葉があり、悉地すなわち密教での成就だけでなく、『無量寿経』に出てくるようなあらゆる願望の成就を考えるのがより自然であろう。

(ふじなか たかし 元嘱託研究員)

〈Summary〉

A Japanese translation and study of *rNam dag bde chen zhing gi smon lam*

(bDe chen smon lam) by Karma Chags-med:

On the practice of transferring of merits, the seventh part of the seven fold offerings,
the generation of mind for the highest enlightenment, and
the beginning part of the transferring of merits for
oneself and others to be born in the Sukhāvātī

FUJINAKA Takashi

bDe-chen-sMon-lam (Prayer-for-the Sukhāvātī) by Karma Chags-med (Skt. Rāgāśya. 1612–1678), a scholar, master-practitioner of bKa'-rgyud-pa and rNying-ma-pa tradition, is the most famous and influential bDe-smon (Prayer-for-the Sukhāvātī) in Tibet, as well as *Zhing mchog sgo 'byed* by Tsong-kha-pa (1357–1419), and belongs to a group of revealed scriptures *gNam chos*. In this paper, I have translated and studied in collaboration with Mr. Nakamikado, this prayer's, the practice of transferring of merits, the seventh part of the seven fold offerings, the generation of mind for the highest enlightenment, and the beginning part of the transferring of merits for oneself and others to be born in the Sukhāvātī.

Key words: Karma Chags-med, bDe ba can gyi smon lam (bDe smon), *rNam dag bde chen zhing gi smon lam* (bDe chen smon lam), the seven fold offerings, the transferring of merits